

不変の型 継承使命に

少林寺流振興会会長 範士九段 親川千吉氏(78)



「クーサンクー」を披露する親川千吉範士九段＝南城市知念志喜屋・千武館親川道場（国吉聡志撮影）



師の仲里常延氏（左）の道場で型の指導を受ける親川千吉氏（右）（提供）

「きのうの初段は必ずしも明日も初段ではない。今日やらなくては」。少林寺流振興会会長で範士九段の親川千吉氏(78)は南城市に少林寺流の大家で師匠の仲里常延氏(1922〜2010年)の言葉を胸に日々の稽古に汗を流す。少林寺流は禅宗の「一器の水を一器に注ぐが如し」を理念とし、空手本来の型に手を加えず脈々と継承しているという。年齢とともに変化する体に合わせ動きを整える親川氏は「日々の鍛錬は大好きな空手の歴史(型)を守るため」と信念を語る。その言葉と表情には、師の仲里氏から託された「歴史」を次世代へ受け継ぐ使命感があふれていた。

(政経部・仲本大地)

朝夕鍛錬 「歴史守るため」

求道

我が道

親川氏は1957年に入道した南部農林高校で空手と出合った。「柔道を習いたかったけど、体が小さかったから諦めて空手を選んだ。卒業後、県外へ移り住むことになり空手から離れた時期もあったという。しかし、空手への情熱は薄れることなく、基本の「突き」を毎日千回打つことを日課としていた。「忙しくてできなかった日は翌日に2千本やったら」と振り返り、自らに妥協を許さなかったという。

仲里氏に師事

県外から沖縄に戻ると73年に地元の知念村(当時)

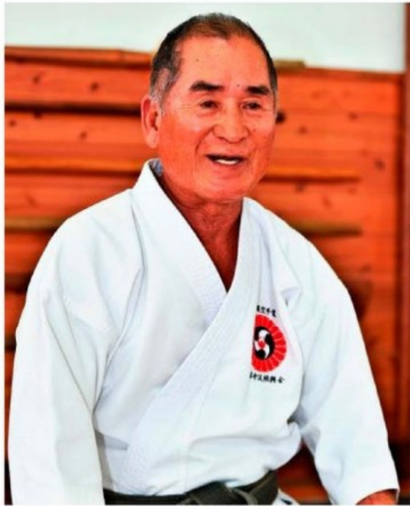


故仲里常延氏

現南城市知念Ⅱで道場を構える仲里氏に師事を仰いだ。がっちりとした体から漂う仲里氏の威厳に圧倒され「ほんとうに怖かった」と印象を振り返る。仲里氏の教えには「空手は『稽古』の稽古であること」とある。型の動作一つ一つが、漢字を書く際の「トメ、ハネ、ハラ」と同様に丁寧で力強く表現することを基本とした。少林寺流は動作の寸分の乱れが型の崩れにつながるため、技の角度や出し方をミリ単位で厳しく指導された。ただ「仲里先生との出会いは一番の幸だった」と空手人生の転機を振り返る。学んだ型は度々も反復練習をした。少林寺流最後の手の型「クーサンクー」を体得した時は感無量だったという。

内外から訪問

今でも受け継がれてきた「不変の型」へのこだわりは強く、朝夕合わせて約3時間の鍛錬を続ける日々だ。そんな外向きな姿勢を慕って、国内外から多くの空手愛好家が南城市の道場を訪れ、指導を仰ぎ型の一つ一つを確かめ合う。親川氏がたまに披露する演武に門下生からは「稽古を極めた書家のように、型の一つ一つの確で素早く、流れる行書のように」と感嘆の声も上がる。



沖縄空手の醍醐味(だいきみ)を語る親川千吉氏



大会で得意の型「クーサンクー」を演武する親川千吉氏(提供)



稽古で突きを指南する親川千吉氏(右)

歴史(型)を絶やすまいと門下生の指導にいそむくとは大好きな空手や敬愛する仲里氏への恩返しでもある。「いつまでできるかわからない」と笑う謙虚な言葉とは裏腹に、稽古では空気を切り裂く力強い突きや乾いた音が道場に響いた。

おこたわり「道場めぐり」と「熱視線」は休みました。